

一葉の墓

泉鏡花作

全一章

門前に焼團子賣る茶店も淋しう、川の水も靜に、
夏は葉柳の茂れる中に、俤、時としては馬車の差置
かれたるも、此處ばかりは物寂びたり。櫛線香など
商ふ家なる、若き女房の姿美しきも、思なしかあは
れなり。

或時は藤の花盛たりき。或時は墓に淡雪かゝれり。
然る折は汲み來る闕伽桶の手向の水も見る／＼凍る
かとぞ身に沁むなる、亡き樋口一葉が墓は築地本願
寺にあり。

彼處のあたりに、次手あるより／＼に、予行きて詣
づることあり。

寺號多く、寺々に附屬の卵塔場少なからざれば、
はじめて行きし時は、寺内なる直參堂といふにて聞
きぬ。同一心にて、又異なる墓たづぬるも多しと覺し

く、其その直參堂ぢきさんだうには、肩衣かたぎぬかけたる翁おきな、頭つむりも刷立すりたての
うら少わかき僧そう、白木しらきの机つくゑに相對あひたいして帳面ちやうめんを控ひかへ居をり、
訪とふ人ひとには教をしへくる。

花屋はなやもまた持場もちばありと見みゆ。直參堂ぢきさんだう附屬ふぞくの墓はかに詣もつ
づるものゝ支度したくするは、裏門うらもんを出いで、右手みぎての方かた、墓ほ
地に赴おもむく細道ほそみちの角かどたる店みせなり。藤ふぢの棚庭たなにはにあり。聲こゑ
懸かくれば女房立にようばうたちい出いで、いかなるをと問とふ。桶をけには
さゝやかなると、稍葉やほの密こまやかなると區別くべつして並ならべ置お
く、なかんづく其そのの大おほいなるをとて求もとむるも、あはれ、
亡なき人ひとの為ためには何なにかせむ。

線香せんかうをともに買かひ、此處こゝにて口火くちびを點てんじたり。兩りやう
の手に提さげて出いづれば、素跣すはだし足の小童せうどう、遠とほくより認みと
めてちよこ／＼と駈かけ來きたり、前まへに立たちて案内あんないしつゝ、
やがて淺あさき井戸いどの水みづを汲くみ來きたる。

さて、小ちひさき手てして、かひ／＼しく碑しゐしを清きよめ、花立はなたて
を洗あらひ、臺石だいしに灌そぎ果はつ。冬ふゆといはず春はるといはず、
其それも此こも密しきみの葉は残のこらず乾からびて、横よこに倒たふれ、斜ななめになり、
仰あをむ向けにしをれて見みる影かげもあらず、月夜つきよに葛くずの葉はの

裏見る心地す。

目立たざる碑に、先祖代々と正面に記して、横に、
智相院釋妙葉と刻みたるが、亡き人の其の名なりと
ぞ。

唯視たるのみ、別にいふべき言葉もなし。さりた
がら青苔の下に靈なきにしもあらずと覺ゆ。餘りは
かなげなれば、ふり返る彼方の墓に、美しき小提灯
の灯したるが供へありて、其時薄暗かりしかなたに、
蠟燭のまたゝく見えて、見好げなれば、いざ然るも
のあらぼとて、此の邊に賣る家ありやと、傍なる小
童に尋ねしに、無し、あれなるは特に下町邊の者の
何處よりか持て來りて、手向けて、今しがた歸りし、
と謂ひぬ。

去年の秋のはじめなりき。記すもよしなき事かな、
漫歩きのすさみなるを。

【完】